

<4月 22 日改訂版>

作品情報

タイトル: CALAMITY カラミティ

原題: une enfance de Martha Jane Cannary

英語題名: Calamity, a childhood of Martha Jane Cannary

監督: Rémi Chayé レミ・シャイエ

制作スタジオ Maybe Movies (フランス)/nØrlum (デンマーク)

製作費: 8 百万ユーロ (9 億 6 千万円)

World Premia:

2020 年 6 月 アヌシー国際アニメーション映画祭 にて最高賞クリスタル賞受賞



<アヌシー国際アニメーション映画祭>

アヌシー国際アニメーション映画祭は、1960 年にカンヌ国際映画祭からアニメーション部門を独立して創設された、アニメーション映画祭としては最も歴史がある世界最大規模のアニメーション映画祭です。

日本の作品としては、1993 年に宮崎駿監督『紅の豚』、1995 年に高畑勲監督『平成狸合戦ぽんぽこ』が長編部門グランプリをそれぞれ受賞しています。近年では湯浅政明監督『夜明けを告げるルーのうた』の長編部門クリスタル賞が記憶に新しい。(注)グランプリ名称が近年クリスタル賞に変わっています。

<概要>

『カラミティ』は、2019 年ようやく日本公開され、その輪郭線のない美術的な画風と、リアルな表現で話題を集めたフランス・デンマーク産アニメ『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』の監督であるレミ・シャイエ監督による最新作です。

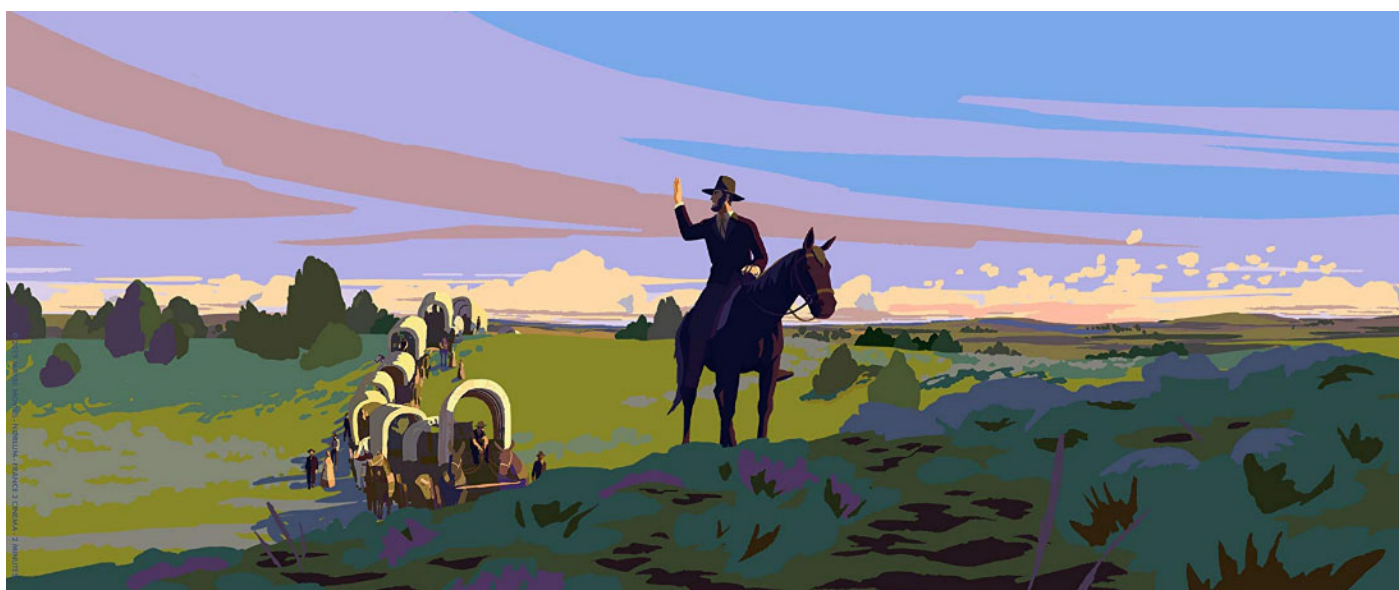
2020 年春、コロナ禍を回避して完成した本作は、アニメーションの最高峰の映画祭であるアヌシー国際映画祭にて見事クリスタル賞(グランプリ)を受賞しています。アヌシーにてワールド・プレミア上映後、各国映画祭を巡回、本国フランスで 500 館を超える劇場にて大規模公開されました。制作スタジオとスタッフも前作『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』の主要メンバーが再集結しており、早くも各国から期待が高まっている作品です。

日本では、『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』と同じく、リスキットの配給により、2020 年 12 月に開催の横浜フランス映画祭にて字幕版をジャパン・プレミア上映し、2021 年 3 月に開催された東京アニメアワードフェスティバルではオープニング作品に選出され日本語吹き替え版をジャパン・プレミア上映されました。本作は 2021 年夏に公開予定です。



<あらすじ>

『カラミティ』は、西部開拓史上、初の女性ガンマンと知られるマーサ・ジェーン・キャナリーの子供時代(12歳)の物語です。マーサは家族とともに大規模なコンボイ(旅団)で西に向けて旅を続けていますが、旅の途中、父親が暴れ馬で負傷し、マーサが家長として幼い兄弟を含め、家族を守らなければならない立場になってしまいます。普通の少女であったマーサは、乗馬も、馬車の運転も経験がありません。そんなマーサは、少女であることの制約に苛立ち、家族の世話をする義務をよりよく果たすために少年として服を着ることを決心します。女性は女性らしくという時代にあって、マーサの生き方は、古い慣習を大事にする旅団の面々と軋轢を生みます。更にマーサを野獣からの危険から救ってくれた中尉をコンボイに引き入れたことで、盗みの共犯の疑いまでかけられてしまいます。そして…。



<みどころ>

行方不明になった祖父を見つけるために一人北極を目指して旅立つ14歳の少女である前作『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』と同様に、本作『カラミティ』も12歳の少女の成長譚です。主人公マーサが様々な困難に立ち向かう中で周りの大人たちに影響を与え、大人たちも、いつしか少女とともに成長するという物語です。レミ・シャイエ監督の作品は、前作が文部科学省、一般劇映画部門にて少年、青年、成人、家族を対象に選定を受けているように幅広い世代を対象としています。

(スタジオジブリの高畑監督が称賛し、応援していたこともあって、『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』は、昨年12月に“三鷹の森ジブリ美術館ライブラリー”としてDVD/ブルーレイがディズニーから発売されました。)

境界線のない独特な手法は、あたかも美しい絵画をみているようだ、と評価が高く、その手法は、新作『カラミティ』で、更に磨きがかかっています。アニメーター 井上俊之氏をはじめ、国内の多くのアニメーター、漫画家たちが、その作風を絶賛しています。本作では220ページを超える“Art Book”の発売も予定されており、美術・アート界でも話題となることでしょう。

レミ・シャイエ監督

芸術学校でデッサンを学んだ後、複数のアニメのストーリーボード、レイアウト、特殊効果を担当。そしてフィリップ・ルクレル監督の

「The.Rain.Children(仏原題 Les.enfants.de.la.pluie)」といった長編作品のレイアウト班に加わった。その後は監修のためアジアに数度渡るが、2003年にはアニメーション映画学校ラ・プードリエールに入り、短編映画「Le.Cheval.Rouge」、「Grand-Père」(Canal.J)、「Eaux-Fortes」の三作品を制作する。

その後はトム・ムーア監督の『ブレンダンとケルズの秘密』の助監督兼ストーリーボードを担当するなど経験を積み、ついに『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』の監督兼原画家となる。最新作は『カラミティ』。開拓時代のアメリカ初の女性ガンマンとして知られるカラミティ・ジェーンの少女時代を描く本作は2020年アヌシー国際アニメーション映画祭 長編アニメーション部門クリスタル賞(グランプリ)受賞。



レミ・シャイエ監督作品の魅力 —— 平面と色彩の調和が織りなす美しき世界 ——

叶 精二(映像研究家)

●実在の人物・事件から架空の物語を創作する

カラミティ(疫病神)・ジェーン。西部開拓時代のアメリカで活躍した自由奔放な女性ガンマン。その容姿は束ねた金髪に碧眼で、アングロサクソン系の美女に見える。こうしたイメージは、ミュージカル映画『カラミティ・ジェーン』(1953年)でドリス・デイが彼女を演じた頃から変わらない。『トイ・ストーリー』シリーズに登場するカウガール人形「ジェシー」もカラミティがモデルらしく、やはり金髪碧眼だ。

しかし、本作のヒロイン「マーサ・ジェーン・カナリー」のキャラクターデザインは全く違う。茶色の髪に太い眉毛、丸い鼻は、どちらかと言えばヒスパニック系に見える。残された写真を見る限り、従来のイメージより本作の方が本人に近い。実在の場所・人物・事件を基にオリジナルを創作するレミ・シャイエ監督のスタイルは、前作『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』と共通する。

『ロング・ウェイ・ノース』の起点は、脚本家クレール・パオッティ(Claire Paoletti)の発案による「祖父の汚名を注ぐために旅立つロシア貴族の少女の物語」であったと言う。シャイエ監督とパオッティは、イギリスの冒険家アーネスト・シャクルトンが率いた「エンデュアランス号の南極漂流」(1914~1916年)をヒントに舞台を「Tout en haut du monde(地球のてっぺん)」である北極に改変。脚本にパトリア・ヴァレックス(Patricia Valeix)、ファブリス・ドゥ・コスティル(Fabrice de Costil)を加え、砕氷船の遭難と奇跡的帰還という大胆かつ劇的なシナリオへと再構築した。

一方、本作のサブタイトルは「une enfance de Martha Jane Cannary(マーサ・ジェーン・カナリーの子供時代)」。カラミティ本人は自己演出の虚言癖があり真偽不明の経歴が多く、特に幼少期は謎が多い。シャイエ監督は脚本のサンドラ・トセロ(Sandra Tosello)、ファブリス・ドゥ・コスティル(Fabrice de Costil)と伝記『The Life and Legends of Calamity Jane』(Richard W.Etulain 著、日本語版なし)を基に史実を調査。カラミティは「幼少期に一家でミズーリ州からモンタナ州まで楽しい旅をした」と語っているが、その詳細は分かっていない。そこで年代を1863年(11歳)とし、舞台をワイオミング州(ホットスプリング郡)からアイダホ州へ向かう「オレゴン・トレイル」に設定。母の死後、父が旅団の馬車隊に加わり移転先まで旅をする物語とした。当時は南北戦争の最中である。サムソン少尉や大佐が属する「第3騎兵隊」はブルーの軍服から北軍と思われる。

前作との共通点は設定や舞台だけではない。男性社会の中で苦しみながら働き、めげずに旅を続ける中で自立し、やがてリーダーシップを発揮するヒロインの生き様。多数の登場人物がそれぞれ事情を抱えており、打倒すべき悪人

が存在しないという民衆感。健気に寄り添う愛らしい犬の存在。前作の白熊、本作のピューマ・熊・蛇などあくまでリアルな生物描写。どれもが、信頼・勇気・決断といった普遍的なテーマを構成する重要な要素となっている。

●簡素なキャラクターと空間の絵画的色彩設計

シャイエ監督作品の最大の特徴は、色面で塗り分けられたキャラクターと背景が一体となった画面の美しさである。キャラクターに輪郭線はなく、色面の顔に眼・鼻・口などの極めて少ない線を上描きした簡素な造形だ。線描の過密化によって質感や装飾性を高めようという発想とは真逆のスタイルだ。元々『ロング・ウェイ・ノース』のために開発された様式であったが、本作では一層の洗練と同時に照明・配色などに複雑な進化が見られる。前作でも作画監督を務めたリアン・チョー・ハン(Liane-Cho Han)による的確かつ繊細なアニメーションと高低差を活かしたレイアウトが作品の基礎を支えている。

とりわけ自然の風景描写は圧巻である。ピンクやパープルで陰影を施された雲、ブルー・グレー・グリーンの混在する平原の草むら、青く明るい夜空。それらの空間は平面的でありながら深い広がりを持ち、湿度や匂いまで感じられそう。透明な装いを捨て、潔く水色に塗られた川の水飛沫からちゃんと冷たさが伝わって来る。情報過多の写実的3DCGのVR映像とは根本的に異なる、簡潔で調和の取れた色面から喚起される「感覚的臨場感」がそこに在る。



前作に続き色彩監督を務めたパトリス・スュオー (Patrice Suau)は、後期印象派を代表する画家ポール・ゴーギャンとその教えを起点として展開した「ナビ(予言者)派」、その後継運動である「フォービズム(野獣派)」の色調を参考にしたと言う。19世紀末にヨーロッパで始まったこれらの新たな絵画運動は、人の心理や感覚を写実を廃した色彩で表現しようと試みた。そして、それらの運動は浮世絵を代表とするジャポニスムの強い影響を受けていた。その遺伝子を受け継ぎ、未だ線描の漫画や「アニメ」を愛する我々日本人には、本作に親和性を感じる根拠がある筈だ。

近年 EU 諸国を中心に、幾多の革新的長編アニメーションが生まれている。『ディリリとパリの時間旅行』のミッシェル・オスロ監督も、『ウルフウォーカー』のトム・ムーア監督も、『手をなくした少女』のセバスチャン・ローデンバック監督も、そしてシャイエ監督とそのスタッフも、手描きにこだわる日本(特に宮崎駿・高畑勲両監督)の影響を受け、写実とは異なる作画様式の導入に挑んで来た。それらはアニメーションの美術的価値を押し上げる新たなムーヴメントと言い換えても良い。1世紀以上の時を隔て、写実から心象へと転換した美術史が繰り返されているように思えてならない。

1890年、ナビ派の代表的画家・理論家であるモーリス・ドニは論文『新伝統主義の定義』にこう記した。「絵画が、軍馬や裸婦や何らかの逸話である以前に、本質的に、ある順序で集められた色彩で覆われた平坦な表面であることを、思い起こすべきである」

シャイエ監督の作品群からは、ドニの提言に通じる誇りと信念を感じる。美しい色彩で塗り分けられた豊かな空間。その中に溶け込み、存分に躍動するキャラクターたち。眼に優しい平面の絵がスクリーンを通じて語りかけて来る。

その心地よさと驚きこそ、2Dアニメーションの本質的魅力であり、揺るぎない優位性である。

日本語吹替版：声優情報

伝説の女性ガンマン、カラミティ(厄介者)・ジェーンの少女時代。困難に立ち向かいながら自立していく主人公マーサ・ジェーンには、Youtuber・モデルでも活躍中の福山あさき。昨年公開のルーマニア・フランス産アニメ『マロナの幻想的な物語り』(主役の犬の声:のん)において演じた、“通行人”からの大抜擢となります。少女から芯の強い大人の女性への変貌を新人ならではの思い切った演技で演じています。



マーサ・ジェーン

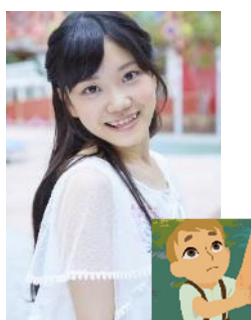


CV 福山あさき

マーサの妹レナ役には「アイカツフレンズ！」の松永あかね、幼い弟エリージェには「あそびあそばせ」の木野日菜、マーサの親友イヴに木戸衣吹が配されました。マーサのライバルのイーサンに畠山航輔、その父親でマーサを追いつめる旅団長アブラハムには杉田智和、イヴの父親には上田耀司と人気ベテラン声優が脇を固め、また浅水健太郎、成澤卓、前内孝文といった『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』でおなじみの声優陣も顔を揃え、楽しみな布陣となっています。



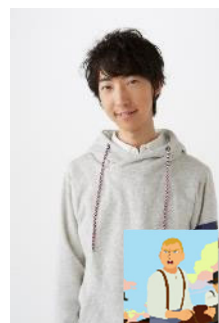
レナ CV 松永あかね



エリージェ CV 木野日菜



イヴ CV 木戸衣吹



イーサン CV 畠山航輔



アブラハム(旅団長)



CV 杉田智和



イヴの父



CV 上田耀司

物語り後半の大事なバディ(仲間)役には『マロナ……』の端役に起用した際、そのコミカルな表現力をかわれ林瑞貴が抜擢されました。福山あさき、林瑞貴両名の“端役からの大抜擢された”新人による珍道中の掛け合いシーンも見逃せないポイントとなっています。

主要キャストから(1. 役どころを演じての感想 2. ファンへのメッセージ/好きなシーン)

■ 福山あさき : マーサ・ジェーン

1. マーサは自分の気持ちに素直で、いい意味でも悪い意味でも真っ直ぐな女の子でした。すごく負けず嫌いで、一度自分がやると決めたら周り何言ってもやり通そうとする性格は、自分と重なる部分があって演じていて楽しかったです。
2. マーサは活発的に行動するが故に、周りから煙たがられて疫病神扱いされてしまうんですけど、何があっても自分を信じて進んでいく姿は見ていて元気をもらえますと思います。旅を通してたくましく成長していくマーサを是非見ていただきたいです。

■ 杉田智和 : 旅団長

1. 生と死が隣り合わせの生活を送る集団のリーダーとして、厳しさの中に複雑な意味を持たせるように意識し、どうしても息子には甘くなる部分で人らしさを忘れないようにしました。
2. 英雄は自身で英雄と名乗らず、自らの生き様で示す。この物語に込められた想いが伝われば幸いです。

■ 上田耀司 : イーサンの父

1. 前作「ロング・ウェイ・ノース」の時から注目していたレミ・シャイエ監督の作品に関われて光栄です。イヴの父は優しく面倒見の良い人ですが、当時の長旅は命懸け。その辺りの彼の苦悩を感じました。
2. マーサ・ジェーンが馬の訓練をする場面があるのですが、孤独と不安をはね除ける様に夢中で生きる術を手にしようと励む姿に心打たれます。そして、星空の表現が素晴らしい。劇場のスクリーンでみたらきっと素敵だと思います。

■ 松永あかね : マーサの妹レナ

1. レナ・キャナリーを演じさせていただきました。レナは怒ったり笑ったりコロコロ表情が変わるので、演じていて楽しかったです。妹であることや好奇心が強いことなどレナとの共通点が多く、自分の幼い頃を思い出しながら演じました。
2. マーサの生き方からとても勇気をもらえる作品です。私自身「カラミティ」を観て、こんな生き方もカッコいいな…と感じました。色づかいや音楽で、さらに世界に入り込めました。マーサがどのように行動し成長していくのか、気になった方は是非観てみてください。

■ 木野日菜 : マーサの弟エリージャ

1. エリージャは作品の中でも特に小さい男の子だったので、その歳らしいハツラツさや素直さを大切に演じさせて頂きました。苦手な食べ物は食べたくない！疲れたから抱っこして欲しい！思った事はあまり考えずにそのまま言葉や行動に繋がってしまうエリージャに演じながらとても愛おしくなりました。
2. 沢山好きなシーンはあるのですが、やはりマーサが家族と一緒に過ごしているシーンは私の中でも思い出深いシーンです。物語が本格的に動く前のシーンですが、このシーンがあるからこそ、女性のマーサのカッコ良さが引き立っていると思うので、とても好きなシーンです。

■ 木戸衣吹 : マーサの親友 イヴ

1. 私が演じるイヴは、主人公マーサの数少ない理解者で親友です。この作品の中では一番おしとやかで、いわゆる「女性らしい」キャラクターなのではないかと思っています。「女性は女性らしくあらねばならない」という村の言いつけに逆らうマーサを戸惑いながらも応援する心の優しい女の子です。
2. この作品には「自分らしく生きる」という大切なメッセージが込められていると思います。ありのままの自分であることの大切さ、家族、仲間の絆や愛などいろんなものを感じて頂けたら幸いです。音楽もとても素敵なのでそこにも注目しながら楽しんで頂けたらと思います。

■ 畠山航輔: マーサのライバル イーサン

1. イーサンを演じるにあたっては、単に「悪いヤツ」、「イヤなヤツ」で終わらないよう、彼自身の脆さや、ある種のかわいらしさのようなものも表現できればいいなと思い、意識して収録に臨みました。また、個人的なことになりましたが、元々吹き替えを志望してこの世界に入ったので、今回初めて吹き替え作品に参加させて頂きとても嬉しかったのを覚えています…！
2. マーサたちの幌馬車を引っ張るイーサンと、マーサが御者台の上で会話するシーンは、個人的に好きな場面です。マーサの自立心と好奇心、イーサンの傲岸不遜さ、そして2人の「幼馴染み感」が滲み出ていて、短い場面ではありますが印象的なおもしろさがありました。牧歌的なながらも、自然界への畏敬の念や、マーサが巡り合う様々な人びととの一期一会が丁寧に描かれた今作。多様な要素をふんだんに含んでいるので、一瞬一瞬を飽きることなくお楽しみいただけたと思います。小さな女の子が屈することなく成長していくその過程を、ぜひ、劇場でお確かめください！

日本語吹替え版 キャスト & スタッフ

マーサ・ジェーン	福山あさき	サムソン	恵山渉一	塩尻浩規	八十亀一
アブラハム	杉田智和	ジョナス	林瑞貴	西村耕平	田口尚明
レナ	松永あかね	ムスタッシュ	南條ひかる	金子隼人	前内孝文
エリージャ	木野日菜	大佐	中山祥徳	真白健太郎	徳森圭輔
ロバート	常盤昌平	カーソン	成澤卓	関野渉	京雅
イーサン	畠山航輔	保安官	川上晃二	演出	安藤直子
イヴ	木戸衣吹	軍服の男	森嶋秀太	録音・調整	水本大介
イヴの父	上田耀司	パイプの男	蓮岳大	キャストイング	金子秋波(クレール)
エスター	堂坂有希	ルイ	中村精道	制作・配給	リスキット
ヘラ	渡辺はるか	丸顔の男	浅水健太郎		
みつあみ少女	堀越せな	少女B	夜道雪		
少女A	武藤志織				

【公開表記】 2021年初夏より全国順次公開予定

タイトル: CALAMITY カラミティ

監督: Rémi Chayé レミ・シャイエ

原題: Calamity, Une Enfance de Martha Jane Cannary

英語題名: Calamity, a childhood of Martha Jane Cannary

コピーライト: © 2020 Maybe Movies ,Nørlum ,2 Minutes ,France 3 Cinéma

2020年 | フランス・デンマーク | フランス語 | 日本語字幕 | 日本語吹替え |

DCP | カラーICS | 82分

公式サイト: <https://calamity.info> / 公式ツイッター @calamity_movie

写真、ロゴ、報道資料のデータは riskit.jp のHP プレスキット からダウンロードいただけます

➔ https://riskit.jp/press_calamity.html

«取材、作品についてのお問い合わせ先»

【宣伝協力】プリマステラ 貝塚千恵 Tel: 090-0418-1101 Mail: primastella316@gmail.com

【配給】株式会社リスキット 金子 Tel: 047-314-5316 / 090-7414-5875 Mail: gaku0615@gmail.com

2021初夏 全国公開予定